

受賞作品（優秀賞）

『どのようにネットとつき合うか』

沖野 隼之介

## 『どのようにネットとつき合うか』

はじめに

ある人は、歴史上最も偉大な発明が“火”だという。またある人は、それが“文字”だという。この議論に結論を下すことは容易ではなかろうが、「どのようにこの道具を使えばよいか、と最も議論された発明は何か」という問いには答えることができそうだ。それは“インターネット”である。日本において、一般家庭にインターネット環境が広まり始めたのは1990年代になってからであるが、僅か25年の間に、インターネットはかけがえのない技術の一つとして市民の生活に寄りそうこととなった<sup>[1]</sup>。PCの普及率が上がると同時に、技術革新はますます進み、インターネットの普及率も上昇していった。

2005年には、インターネット（以下、便宜のために“Web”という言い換えも併用する）を利用するユーザやビジネスマンの間で“Web2.0”という新語が話題となった。ティム・オライリーによって提唱されたWeb2.0とは“情報の送り手から受け手への一方的な流れであった従来の状態から、誰でもがインターネットを通して情報を発信できるように変化していく流れのこと”である<sup>[2]</sup>。そう、2015年現在のWebそのものを言い表している。2005年の時点で、それから発達するWebの進化を言い当てていたことになる。

Web2.0はもはや当たり前概念になっており、明言する者もいなくなっている。現状では、SNSやWikipedia、掲示板、生活の情報サイトまでもが、いわゆる受信と配信という双方向性によってコンテンツを保っている。一般市民が、インターネットを通じて容易に情報を発信し、その反応を受け取ることができる。インターネットの市民化からたった15年余りの間にこれだけの発展があったのだ。日本国内ではWeb利用者を導く法整備が間に合わず、技術が独り歩きした形となったのも当然であろう。かつてはWeb関係の法整備に関して闊達な議論が行われたものだが、それも2015年の現在ではおよそ成熟したと考えてもよさそうだ。また、ある程度は市民がインターネットに適応したとも考えられる。若い世代での利用率はほぼ100%に達しており(図1)、インターネットが電気・ガス・水道に次ぐ、第四のインフラと言える状況になっている。

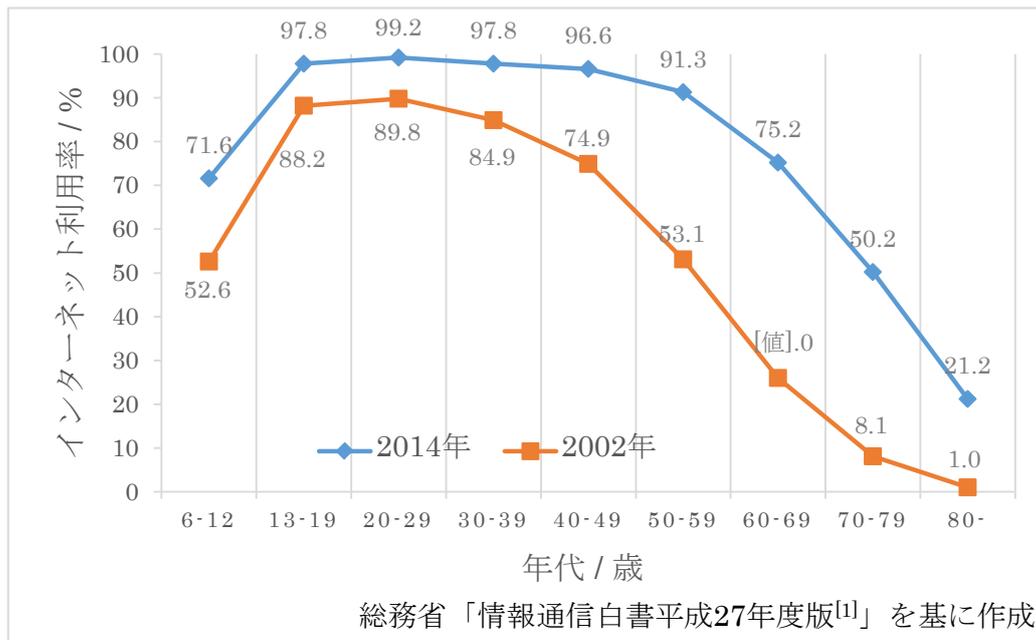


図1. 年代別、インターネット利用率の向上

だいたい 13 歳から 50 歳の範囲において、インターネットの利用率はほぼ 100%と言ってもいいのが 2015 年の現状なのである。

この文章では、まず 2015 年現在の Web 上で起こりうる様々な出来事について、事例を交えて参考にしていく。そして、これまで行われてきた SNS の議論から一步進んで「若年層のインターネット利用率がほぼ 100%に達したいま、Web をどのようにとらえ、利用していけばよいのか」について考え、提言していきたい。

## 2. 大学教授の Wikipedia 引用

先日、とある学術論文が発表されたことで、ウェブ上の研究者コミュニティが一時、騒然となった。その学術論文は「炭酸ガスと水から石油を生成する」ともとれる内容であり、結論から言うと、解析方法に難があるのではないかということで、話題は収束していった。この発端はこの論文に関して、著者の所属する大学がプレスリリースを公表したことで、広く知られわたることになったのである。

“炎上する”あるいは“バズる”といった俗語も一般に聞かれるようになってきたが、この場合はプレスリリースという形で、大学側が積極的に話題にしてもらおうと動いた形だ。理研のグループが発表した STAP 細胞の論文に不正があったということで話題になったことは皆様にも記憶の残るところと思う。これらは一般の若者が SNS に違法行為をアップロードして騒がれるような“炎上”とは情報の種類が違う。情報の発信元は、なるべく多くの人目に触れるようにと自ら広報を行っている形だ。

この一連の騒動の中で、ある一つの指摘が、教育関係者の間で話題となった。それは、以下のような指摘である。

「この学術論文は、引用文献として、Wikipedia を引用している。我々教育関係者が学生に対して Wikipedia 等の Web 情報は引用文献に用いてはならないと言っているにも関わらず、大学の名誉教授であるところの筆者にこういうことをされては、説得力がなくなる。我々の言っていることは何だったのか」

確かに、原著論文<sup>[3]</sup>を確認してみると、参考文献の 6 番目に “Wikipedia, the free encyclopedia 2015” という引用があることを確認できる。自然科学の世界では、論文の引用に用いてよいのは原著論文に限り、二次文献である教科書ですら、引用を避ける風潮がある。それほどに神経質な世界で、自由編集の Web 百科事典を引用するようなことがなされたのだ。それも、人々から目標ともされるべき名誉教授が、である。科学者は STAP 細胞のとき同様、科学的な検証が済んだとたんに興味を失ったが、今回の論文は残酷な尾ひれを残すことになったのだ。我々がいままで学生に言ってきたことはなんだったのか、自分たちよりずっと偉大な先生がそんなことでは、これから学生をどう指導して行ったらよいのだろうかと大学関係者らは頭を悩ませた。

この事件の教訓は多くありそうだが、ここではひとつ指摘するにとどめておきたい。それは「大学の教授職に就くひとであっても、人によっては Wikipedia を便利だと感じ、利用しているのだ」という事実である。

## 3. Wikipedia の信用度・情報の双方向性について

Wikipedia の情報が実のところ、どれくらい信用できるのかということに関しては、過去にいくつか

の調査がある。この発端は英雑誌 *Nature* のもの<sup>[4]</sup>であり、それに追従する形で日本の論文<sup>[5]</sup>も出版されている。これらの主張するところは、細部では異なるが「おおむね、情報は信頼できる」ということになる。*Nature* における英語版 *Wikipedia* の評価は「国際百科事典 *Britannica* に匹敵するレベルであり、新聞・ニュースよりも優れている」となっている。この結果は百科事典の「あることがらにおける内容を必要最低限調べておきたい」という目的には、十分かなっていると判断できる。

*Wikipedia* を *Britannica* と比較した際、特筆すべき事項がもう一つある。これらの調査から約 10 年たった今もなお、記事や情報が増え続けているということだ。Web の一つの利点である“速報の更新性”が顕著に表れている例としては、ノーベル賞受賞のニュースが発表されると、その 5 分後には *Wikipedia* の内容が更新されているのが見て取れる。これらは Web を介して一般の有志によって無償で更新され、いまもなお情報が増大しているわけである。

ここまで *Wikipedia* を例にとったが、一般の有志が更新することで情報が増えるようなサービスはたくさんある。インターネット大手通販サイト“Amazon”の商品レビュー、飲食店情報サイト“食べログ”の一般客評価にはじまり、料理レシピ投稿サイト“Cookpad”、動画投稿サイト“Youtube”や“ニコニコ動画”などはすべて、ユーザの投稿をもとに情報を増やしている。そしてこれらの情報が副産的にであれ Web サービスの質を高めているのである。今回焦点を当てている若年層のなかで、これらのサービスを使ったことがないというひとは、ほとんどいないのではなかろうか。

これらのサイトが登場したことで、人々の生活はどう変わったのだろうか。または、変わらなかったのだろうか。

実のところ、これらのサービスに類似したものは、古くからあったはずである。Web 通販は昔から雑誌・テレビ媒体で行われてきたものだし、口コミもつまるところ、友人間の会話とやっていることに変化はない。飲食店の情報を取り扱った雑誌は古くからあったし、動画や絵や文といった作品を投稿するには、門戸は狭かったが雑誌や賞という選択肢はあったはずだった。それでは何が変わったのだろうか。これに関しては、Web2.0 の発案者である O'Reilly 氏自身が、インタビュー中に答えている言葉が象徴的である。

「この言葉を使ったのは、みんな、ドットコムバブルの後、ウェブが終わったと思っていたからだ<sup>[6]</sup>」2005 年の時点で、多くの人間が「Web が終わった」と思っていたことを示唆している。つまり「思ったよりもできることはなかった」ということだろうか。当時から双方向性のメディアは多くあったが、Web2.0 を提唱する前は「一部の個人が趣味で Web サイトやブログを開設している以外、お金をもった企業・団体が一方的に発信するのみの世界」があったことを意味するとも考えられる。

この議論から約 10 年たって、いまでは一般市民の声・作品が情報として公開されるのが当たり前の世界になってきた。ここにきて、提唱された Web2.0 の世界は成熟しつつあるとみることができる。

双方向性のある情報を共有する世界、それが今のインターネット事情を顕著に表した文言であると思う。それはそこかしこで議論されているものとも矛盾しない。その正体とは何なのか。

#### 4. 情報化社会における若年層

大手企業のサイトも、話題の SNS であっても、インターネット上でやり取りするのはすべて“情報である”ということを改めて認識しておきたい。Web 上においてあるものはすべて、株式市場の取引であってもなんでも、すべて情報である、と確認したうえで、現状の Web について議論していこうと思う。

インターネットについて語る際、非 Web 社会との比較が成されていることが多い。「いかにしてインターネットとつき合うか」というテーマも、根底には「インターネットと現実とは別物である」という立場にある発言であると思えてならない。しかし、2015年現在、ほぼすべての若年層が、日常的にインターネットを利用しているのだ。新たな国と国交を結んだとか、海の向こうにも国があり人が住んでいることを発見した大昔とはわけが違う。あらかじめあった社会に、インターネットやデジタル製品といったものが介入しているだけなのである。

“デジタルネイティブ”という言葉がある。これは、物心がついたときからインターネットを当たり前前に享受し、PC やスマートフォンによる Web 接続のなかった時代を知らない若年層を指す言葉である<sup>[7]</sup>。ここで再度、図 1 を見ていただきたい。この図における、6-12 歳および 13-19 歳の世代がそれにあたると思われるだろう。10 年後、人々が歳をとればこの図はさらに右側にシフトするはずである。若いことを理由に未だインターネットを使ったことがないという人はいても、最終的にはほとんどの人が利用することになるだろうと考えられる。彼らデジタルネイティブは、インターネットという道具に対して抵抗がなく、すんなりと受け入れられるだろうと考えられている。20 年後、50 年後はほとんどの世代がデジタルネイティブになりうるのだ。2015 年現在、電気・ガス・水道のない暮らしをしたことのある日本国民がほとんどいないように。

これを実感するにあたって、一つの興味深いデータがある。下の図 2 を見ていただきたい。

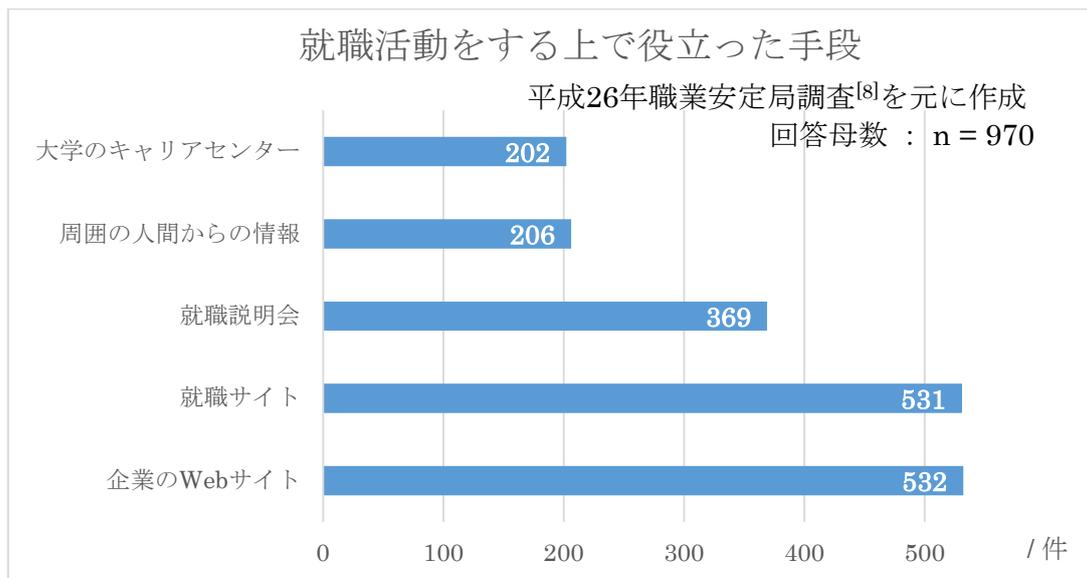


図 2. 四年生大学出身者の就職活動への取り組み方法<sup>[8]</sup>

図 2 は、職業安定局が 2014 年に実施したアンケートの結果である。対象は 2015 年大学等卒業予定者となっており、就活サイトを活用して就職活動を行っている者を対象に 970 名の回答を得ている。この図は「就職活動で役に立ったものは何か」という項目の上位 5 つを抜き出したものであるが、上位 2 つの票が著しく高く、どちらも Web を利用した媒体になっている。この調査対象は就活サイトを利用している人間に限られているため偏りがあることも想定されるが、それにしても圧倒的である。求職活動という人生の一大場面でも、若年層にとっては Web サービスが欠かせないものになっているということが、見て取れるだろう。なかには、求職活動をする者同士が意見を交換し合う“みんなの就活”など、双方向性のメディアも多く存在する。では、若者の Web 利用を如実に表しているともいえる求職活動に関しては、Web の介入でどのように変わったか見てみたい。図 3 は、2014 年の求職活動における「選考に応

募した社数」となっている。

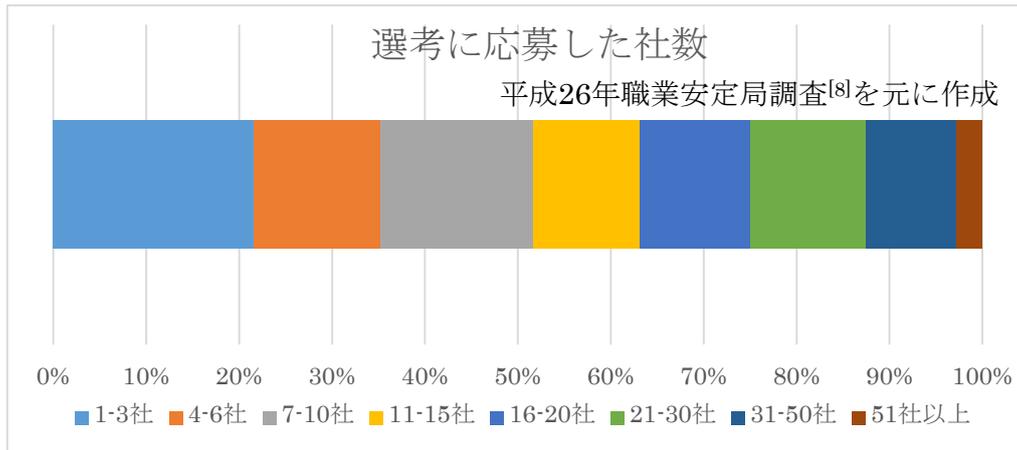


図3. 学生が、就活の選考に応募した社数<sup>8)</sup>

これを見ると、最終的に就職する一社のために、学生は多くの企業の選考を受けているということが見て取れる。約50%の学生が、10社以上の企業に応募している。

情報が過多になり、応募側、専攻側ともに、多くの相手と関係を持たなければならない。この傾向は、年々強まっているという<sup>9)</sup>。Webを利用した就職活動によって、採用試験の回数が増えていることも指摘されている。経済状況によっても変化はするが、大手就職情報サイトも、学生により多くの企業に目を向けるよう、働きかけているという話も聞く。そして、それが負担になっているという話は学生・企業の双方から出ているのが現状だ<sup>10)</sup>。

就職活動の諸問題を深く議論するつもりはないが、ここでこの話題を持ち込んだのには、一つの意図がある。就職活動のWeb利用によって、選考の応募が増えたというこの現象が、Web社会の最も大事な特徴を、顕著に表していると筆者は感じているためである。

## 5. 双方向性のWebメディア～加速化する社会～

ここまで、すでに若年層にとっては、Webに関して「インターネット社会」と形容するにはあまりに身近になっており、Web上もすでに彼ら彼女らの人生の一部になっていることを説明してきた。Wikipedia等、双方向型のメディアは広く浸透しており、是非を問うまでもなく、ひとびとにとってかけがえのないものになっていることがわかった。

また、大学生の就職活動を例に、インターネットを利用した情報過多の実例を見てきた。求職活動における活動の件数が伸びている傾向も見えてきた。採用活動は昔から、入社のための審査を行うという点に関して何も変化がないのに、相手にしなければならない学生の数は増えているという現状を見てきた。

これらを踏まえて、私はインターネットの性質を一つ、提言したいと思う。

「インターネットは、人間の活動を加速化する触媒である。」

触媒とは、反応の本質を変えずに、反応の経路を変えることで反応速度を上げる物質のことを指す、化学の用語である。インターネットもまた、人間の活動の本質は変えることなしに、反応のサイクル・速度だけを大きくするような、そんな触媒に過ぎないのではないか、というのが私の提言の一つである。

この考えを少し紐解きながら、どのようにインターネットという触媒を利用すればよいのか、考えていきたいと思う。

## 6. インターネットという触媒と、ここまでのまとめ

ここまでで再三と宣言しているのは、以下の二点である。

A. インターネットが普及しても、人間の活動の本質は変わらない

B. 情報量は増え、活動は加速している

インターネット社会の性質に関して多くの言及があり、SNSを中心としたWebサービスの利用方法や是非に関して議論しつくされた今だからこそ、シンプルに言いきったつもりである。特にSNSにおいて、いわゆる“炎上”や“犯罪に巻き込まれる危険性”そして“情報漏えい”に関してはたくさんの議論があり、意見が散逸しているように思う。究極的には「節度をもって、ときには利用しなければよい」という結論がほとんどのように見受けられる。まるでインターネットを便利で特別なバーチャル世界のようにとらえて、Web上でつながるときには大変注意してほしい、と一線を引くような姿勢の喚起がほとんどだ。しかし、実際のところ、就職活動を含めた人生の多くの場面で、インターネットサービスが利用されているではないか。このギャップを埋めるシンプルなとらえ方が“触媒でしかない”ということである。

ロコミサイトや自分の創作物を投稿するサイトはたくさんあり、Webショッピングの普及率も上昇している<sup>[1]</sup>。特に若年層は普及率が高く、デジタルネイティブと呼ばれる層も登場し、人生の中にWebサービスの存在が当たり前であった人たちが多くなっている（これからも増え続ける）。しかしこれらのサイトやWebサービスが行っていることは、人間の活動の根幹を変えるものではなく、ただただ便利になっただけなのだ。就職活動は、Webのできる前から、普通にあった。ではどのように便利になったのか。それが、加速する触媒としての役目だ、ということが言いたいのである。インターネットについての議論を行う文献は数多くあるが、そこを過激に言い切ってはいけないと思う。所詮は、ひととひととの営みなのだ。その本質が変わっているわけではない。

## 7. いまインターネットで何が起きているか

ここからは筆者の個人的な体験をもとに「どのようにネットとつき合うか」ということに関して、話をしていきたいと思う。

私は、大学および大学院の過程で、化学を専攻して勉強に励んできた。そこで、他大学の人たちと協力して勉強ができないかと、通話ツールの一つであるSkypeを利用して、Webを介した自主ゼミを試みた。大阪に住む友人と東京に住む友人と私と三人で、毎週、Webのツール上で集まって議論を交わした。結果として、とても有意義な時間だったと思う。また、他のSNSを用いて、研究に関する情報共有を行っている。どちらも、私の研究活動に優位に働いていると思う。

これらは、Webサービスが無ければ成り立たない活動であるが、Webサービスによる新規性はどこまであるものか、という疑問を呈してみよう。大阪のひととの通話だって、理屈の上では毎週新幹線に乗って会うことは可能だし、電話というものは昔からあった。他のSNSだって同じことである。世界中と繋がれるといっても、掲示板に似た活動は小さなコミュニティ内でWeb以前からあったものだ。メールは手紙に置き換えることが容易だし、ロコミだってWeb以前からあった言葉である。

ここで一つ、強調しておきたいことがある。それは「Skype ゼミを行った友人とは、一度も面識がなかった」という点である。Web 以前から、雑誌で文通相手を募集するなんてことはあったと話に聞けけれども、その頻度だけは、インターネットによって急激に上がったものと考えられる。

結果として、Skype を用いたゼミは非常にうまくいった。議論の内容が学問だったためもあるが、話の内容に人格が関与しないことも大きかったと思う。つまり、Web を関して見ず知らずの人とも、議論はできるということだ。自己同一性なんてものはなくても、Web 上では人と繋がれる、ということである。

こう書くと、心のこもった人間関係が築けないのではないか、というお叱りを受けるかもしれないが、待ってほしい。自分はこれらの Web 上での活動を、非常に人間らしい活動だと信じている。最後にその理由をお話しして、私の提言に代えさせていただきたいと思う。

## 8. 会ったことない、が当たり前の世界は薄情か？～どのようにネットとつき合うか～

見ず知らずの人と人間関係を持つ——こう書くと、抵抗のある人も多いことだろう。しかしそれも、当たり前の世界になってきている。これもまた、単なるインターネットの加速作用であって、人間の活動の本質を変えるようなものではない、と私は考えている。

私の例では、自分が選考している化学の勉強を一緒にするために、Skype を用いて見ず知らずの人と議論を交わした。しかし、学内で知り合ったひとと集まって議論をするのと、本質的な差はあるだろうか？ 我々のゼミの中では、そのようなものは見受けられなかった。むしろ、ゼミを必要としている者同士が場所を問わず集まってきたという点で、需要の適化が行われたという点で、良いといえる。ゼミの内容も、化学を専攻している者の集まりということで、専門性の高いものとなった。この、専門性というものが、Web 上において個人の個性を決定しているように思う。いや、Web に関係なく、人間世界はそうできている、と思う。情報交換のために他の SNS でも多くの見知らぬ人とつながりがあるが、私は彼らの専門性という個性を、尊重している。

思えば、Web が出来上がる前から趣味の世界では似たようなことが起こっていた。アカデミズムで言えば、学会で諸先生方と出会うのがそれだ。趣味でも同じである。自分は学部生のころ、休日はバイクに乗って遠出をするのを楽しんでいた。出先ではバイクに乗る私に、見知らぬ人が話しかけてくれた。そこから宴会になるようなことも、一度となくあった。

それが、インターネットという道具を通して、加速しているだけなのだ。一生のうちに出会えるはずがなかったような数の人間と、Web を介して出会えている。私の場合、名前や顔といった記号はさておいて、同じ興味を持ったたくさんの人たちと、情報交換をしているのだ。一方で、Web 上にも私が知らない人は大量にいるし、見たことがないデータも大量にある。しかし、やっていることは現実世界と本質的には変わっていない。むしろ“バイクに乗る私に話しかけてくれる人”と同じように、表出する個性や本質のみで、つながっているように思っている。

“顔も名前も知らない相手”という文言は、Web 関係のことを語る際に、非常に多く用いられる。それも、悪い印象で使われることが多い。しかし、顔や名前といったアイコンなしに、趣味や興味といった個性でつながることができるのは、Web の利点だととらえられないだろうか。そして、学会の例のように、それらは遅かれ早かれ、出会うべくして出会った人たちなのである、と私は考えている。

ここで、留学経験者の友人が言っていた言葉を思い出す。それは「高校生のうちに留学に行ってもよ

いが、それではただの人だ。大学生になって、専門を少し身に着けてから行った方がよいのではないか」というものだ。これは、Web 上で人間関係を作る際にも、適用できると思う。何か個性がない限りは、Web であってもなくても、人と有意義につながることはできないし、個人として尊重されることもないものと思う。

SNS の議論に出てくる“炎上”だって同じである。道徳・モラルに反する行いをした人にインターネットという触媒が作用して、加速的に反応が起こるだけなのだ。渋谷のスクランブル交差点のような、人が多くいる場で犯罪を行えば、インターネットなどなくともいわゆる“炎上”を作り出すことが可能だろう。それを防ぐには、インターネットの利用方法なんて小難しいことを言わずに、清く正しく生きるに限るのである。インターネットという道具は、人間の活動を増幅し、加速するだけのものだ。悪いことをしたり、良い作品だったり Web 上に投げ込めば、人間の能力で制御できないほどに拡散される。

もう、Web 上での人と人とのつながりは、もう制御できないぎりぎりのところまで来ているのではないか。就職活動にて学生が応募する企業の増加がそれである。情報が増え、出会う人が増えたいま、Web のサービスは飽和し、人間の能力的に対応できる限界にきているのだと思う。対応できない数の企業に応募する学生や、“情報過多社会”という問題、“SNS 疲れ”など、すべてはインターネットの、人間の活動を加速化する作用によって、解釈することが可能ではないか。これらほとんど、インターネットの諸問題は結局、活動の加速化という触媒作用によるものだと言い切ることができる。セキュリティ問題も、家に空き巣が入って大事なものが盗まれるような確率が、格段に跳ね上がっただけのことである。もちろん個別に対応しきることは可能であると思うが、インターネットの本質はそこにあるのだと私は思う。

ではどのように付き合うか。私は「人間の能力には限界がある」ということを考慮するべきだ、という提案をしたい。Web で見知らぬ人と出会い交流する、SNS でたくさんのひとと繋がる、就職活動をする、Web 上に機密情報を置く、住所を入力する、クレジットカードで買い物をする、Web 上でゲームをする、趣味のサイトを観る……なんにしたって、インターネットの触媒作用の前には、人間が疲れてしまうほどに速く進行する。速いということは、すべてが多くなる。道具がいくら便利であっても、人間の時間と能力は有限だ。私は、Web がなかったら出会うのに一生かかっただろう数のひとと、Web を通して知り合い、日夜議論を交わしている。そこには私の“化学専攻”という個性があり、人からは一人の自然科学を学ぶ徒として扱われ、頭で考えモラルをもって行動している。はて、実際の私と何も変わらないじゃないか、と改めて思う。私が無趣味で何も持っていなければ、ほとんど相手にされなかっただろう。また、私がもし凶悪な犯罪者であれば晒されるのには変わらない。それが、昼のワイドショーだけか、インターネットも加わるか、それだけの違いだ。清く正しく生きるほかはない。

インターネットや Web の世界を作るのは、結局のところ、人間だ。そしてこれからもその数は増えていくだろう(図 4)。道具がインターネットでつながるのは当たり前になり、それを人間が全部追うのは難しくなっていく。それを理解したうえで、つき合っていくのがいいのだろう。

結局のところ、裏技なんてないのだ。たぶん、1980 年に生きる人が今を見たら、夢のような暮らしだと思うだろう。出先で地図やメールを確認できるようになった。出先で様々な情報を収集し、レストランの予約だってできる。しかし、人間の本質は変わっていない。私が Web 上で人とやっつけていけるのも、Web の有りなしに関係なく、特別な小細工を使っているわけでもなく、私が私として精一杯生きているからなのだと思う。またそのうえで、これからは増えすぎた情報を切り捨てていく潔さも、必要になっ

てくるだろう。それは、インターネットがいくら発達し、Web の文化が成熟したとしても、私は私であり続けるからだ。

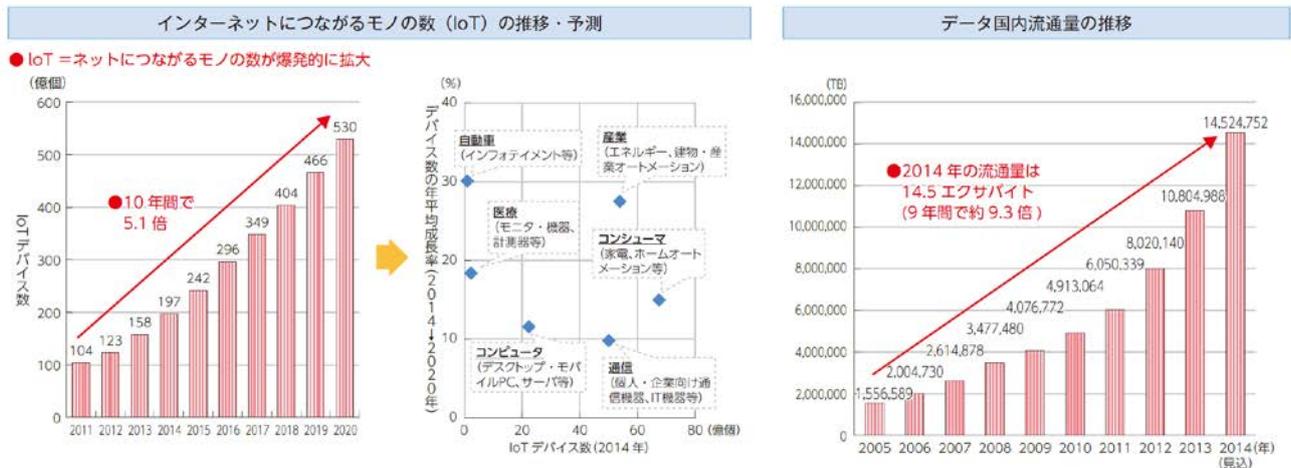


図 4. インターネットにつながる道具の数と、データ国内流通量の推移<sup>[1]</sup>

私の提案は、以上である。以下に、私の主張したいことをまとめて、学生の提言とさせていただきます。

- 一 インターネットは、人間の活動を活発化させ加速するだけの触媒である
- 二 インターネットはもはや、特別なものではなく、世界の一部であり方法に過ぎない
- 三 Web 上であっても、重視されるのは個性である
- 四 人間の活動可能な量には限界があり、加速した世界では量を見極めないと溺れる

#### 【参考文献】

1. 平成 27 年度版 情報通信白書(2015)  
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/pdf/index.html>
2. O'Reilly, Tim "What Is Web 2.0". O'Reilly Network. (2005)  
<http://www.oreilly.com/pub/a/web2/archive/what-is-web-20.html>
3. T. Imanaka, T. Takemoto, "An efficient way of producing fuel hydrocarbon from CO<sub>2</sub> and activated water" *Chem. Lett.* **2015**, in press. (DOI : 10.1246/cl.150720)
4. J.Giles, "Internet encyclopedias go to head" *Nature*, **2005**, 438, 900-901.
5. KUSAKA. Kyuhachi, "Wikipedia : its reliability and social role" *情報管理*, **2012**, 55(1), 002-012.
6. ひろゆきがティム・オライリーに直接きいた、「Web2.0 ってなんだったの？」 - CNET Japan(2007)

<http://japan.cnet.com/news/media/20361105/>

7. Prensky, Marc, "Digital Natives, Digital Immigrants" *On the Horizon*, **2001**, 9 (5), 1-6.

8. 職業安定局 派遣・有期労働対策部 企画課 若年者雇用対策室

「大卒者等のインターネットを通じた就職活動に関する調査」結果(2014)

[http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12602000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu\\_Roudouseisakutantou/0000060147.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12602000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Roudouseisakutantou/0000060147.pdf)

9. Web 版 NHK news watch9 「過熱する“ネット就活”」(2014)

<http://www9.nhk.or.jp/nw9/marugoto/2014/02/0214.html>